

Dr. Wasshi's
ドクターワッキーの認知症
よもやま話

【第2回】

ウソも方便



いくため、65歳の脳ならこれくらいの萎縮は普通だ。

意外なデータがある。人間ドックを受けるひとは、検査をしても自分だけは大丈夫だと思っているひとが多いという。脳ドックも同

は、明らかな異常がみられる。記銘力が低下している。昨日の夕食のメニューをすっかり忘れていて、聞きもしないのに、「深酒し

たから」などと言い訳までしている。「じゃあ、今朝はなにを食べましたか」と聞いたたら、答えに窮した顔が強ばっている。本当に二日酔いがひどいのだろうか？ それとも、怒りっぽいひとなのか？

男性に多いのだが、もの忘れに限らず、ちょっとへんかもというと、なおさら、ガンとして診察を受けないひともある。治る認知症もある。治らないまでも、早く見付ければ認知症の進行を遅くできる薬だってあるのだ。なんかへんだと思つたら、とにかく早く、医者のところへ連れてきてほしい。

じかもしない、とワッキーは思つてゐる。だが、そのいかつい顔をした65歳のAさんの場合は、ちよつとワケありだ。

脳ドックには、もの忘れの検査も含まれている。だが、Aさんは、自分で、「もの忘れなんかゼーんゼンない」と言い張る。が、そこがあやしい。だいたいが、65歳になつて、ちょっとしたもの忘れなど当たり前ではないか。そして、Aさんのもの忘れのテストに

年相応に脳は萎縮。
頭のMRI（核磁気共鳴画像法）の検査では、年齢相応の海馬を含めた脳全体の萎縮がみられる。20代から脳の神経細胞は毎日減つて

大脳のあちこちに「白質病変」が散在している。最近、この白質病変を持つているひとは交通事故を起こしやすいという報告もあるが、統計の取り方で結論が違うことだってある。Aさんの白質病変は無症状だ。もちろん、Aさんは、血管性認知症ではない。

繰り返すが、一緒に生活しているひとが必ず同行することを忘れないで。

（石黒修三・医療法人社団いしぐろクリニック理事長）

ま、どのタイプの認知症にしろ、認知症の診断をするには、日常生活に不適切な行動や異常がないか、家族から聞き出さなければならぬ

